

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第88回ワークショップ @名取・関上

むすび塾

被災経験を踏まえた備えについて「家族や親戚の電話番号を紙に書き留めている」「靴は

現在、震災前に比べて住民同士のつながりが薄れ、地域の防災力が低下しないか不安視する声が多く上がった。音楽団体の代表で、関上の小斎聖佳さん(30)は「家族の年齢構成によ

参加者は語り合いを前に地区を見渡せる日和山を訪れ、写真データを使いながら震災前の関上地区や被災当時の状況を振り返った。

津波被災地域の再生を考える

河北新報社は4月21日、通算88回目の防災ワークショップ「むすび塾」を名取市関上で開いた。東日本大震災の津波被害からの地域再生や防災課題について、住民ら9人が意見を交わし、「コミュニティ全体で取り組む大切さ」を確認した。

必要 住民が話す場 備え



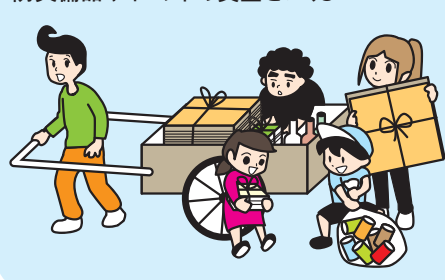
震災の記憶や地域再生に向けた取り組みについて語り合う参加者＝4月21日、名取市関上の関上中央第一団地

地域住民の結びつきを強め、災害に備えるひと工夫

「まんじゅう焼き」などのイベントを通して子どもたちに震災を伝える



廃品回収を行い防災備品やイベントの資金をつくる



監修 減災・復興支援機構

避難ビルの屋上をはじめ避難場所



イラスト 多田健一郎

震災の記憶や地域再生に向けた取り組みについて語り合う参加者＝4月21日、名取市関上の関上中央第一団地

震災の記憶や地域再生に向けた取り組みについて語り合う参加者＝4月21日、名取市関上の関上中央第一団地

日和山から周辺地区視察

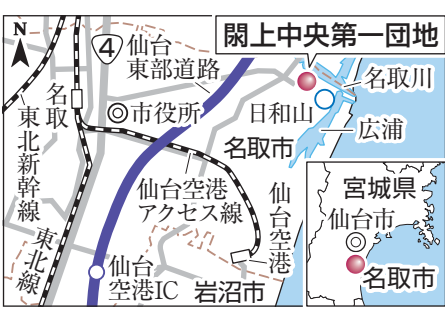


タブレット端末を使いながら震災前後の地域の様子を振り返るむすび塾参加者＝4月21日、名取市関上の日和山

タブレット端末を使いながら震災前後の地域の様子を振り返るむすび塾参加者＝4月21日、名取市関上の日和山

地域情報誌「関上復興だより」を発行する一般社団法人「ふらむ名取」代表の格井直光さん(60)がガイドとなり、震災前後の日和山周辺の変化を説明した。

日和山は震災前はほとんどが田舎で、震災後はほとんどが住宅地になった。震災前は、田舎の風景が広がっていた。震災後は、住宅地の風景が広がった。



「かさ上げ、舗装記憶新しく」震災前後で町並み変貌

名取市関上地区で4月21日開かれたむすび塾の参加者9人は、話し合いの前に日和山(6・33に上り復興工事が進む地区を視察した。震災前の町並みの写真データを収めたタブレット端末を手に、かさ上げされ震災前から大きく変貌した現在の町と見比べた。

震災前は、田舎の風景が広がっていた。震災後は、住宅地の風景が広がった。

石碑 教訓伝える工夫を

東北大災害科学国際研究所 佐藤翔輔准教授

震災前、多くの住民の間で「関上には津波がこない」と語られていた。一方で、「地震イコール津波」と直結して考え、震災時も即避難行動を取った住民もいた。どうして、この二つの捉え方に分かれたのか。今後の街づくりを考えていく上でポイントになる。

日和山では、以前の津波を伝える石碑が再建された状態を確認してきた

が、石碑があるだけでは教訓を生かせない。あえて倒れたままにして、なぜ倒れているのか考える方が伝えられる面もあるのかもしれない。

他地域では、住民たちで石碑の文字をなぞったり、石碑の前で慰霊祭を行ったりといった例もある。地域で開催されている普段の営みと関わりを持たせていくと継続できていくだろう。

■助言者から



東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催の希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)15061。

次回のむすび塾は22日、仙台市太白区で開催します。



●高齢者対策必要 集合住宅型の団地屋上が避難場所になっているが、屋上への避難操作が分からない。高齢者の単身世帯が多く、一戸建てと違い生活の様子が見えず交流の機会が不足しがち。安否確認や避難をどうするかが課題。関上中央第一団地管理組合役員・樋口学さん(51)



●避難取得に難儀 震災時、消防団員として住民に避難を呼び掛けたが「関上には津波は来ない」と言う人の説得に手間取った。阪神大震災同様、関上も通電火災があったとされ、語り部活動では避難の際にエレベーターを落として逃げるよう伝えている。アルバイト・高野俊伸さん(51)



●顔と名前把握を 演奏団体の代表を務め、関上の復興を音楽で応援している。関上には新しい人が次々引越してきて、家族構成が分からない家もある。地域で防災について話し合い、顔と名前を把握しておかないと、何かあった時に大変ではないか。会社員・小高聖佳さん(30)



●つながり深める 関上地区に自宅を再建したが、仕事などで日中、隣人と顔を合わせる機会が少なく、新たなコミュニティづくりの難しさを感じている。住民の出身地もさまざま。少しずつ顔を合わせる機会をつくり、地域のつながりを深めていきたい。パート・梅津美穂さん(41)



●体験伝えていく 震災当時通っていた関上小で津波について学んだことはなかった。昭和と三陸津波を伝承する石碑が名取市関上の日和山にあることは今回初めて知った。震災を知らない小さい子が増えている。地元で聞いた話を自分の体験とともに伝えていきたい。明成高3年・梅津海緒さん(17)



●関上の状況共有 働いていて地域の催しに出られず、住民の顔が分からない。せっかく関上に戻った子どもたちも部活動などで忙しい。顔が分からないと防災を呼び掛けようもない。震災時の関上の状況や身の安全を守ることを教えていくことも大切な「パート・渡部牧さん(47)



●つながり再構築 仲間とともに語り部活動をしている。震災後、地域がばらばらになった気がする。避難の時には声掛けが大切になるので、つながりが持てるよう一から関係をつくっている状態だ。顔が分かる関係が防災の基本だと思う。『ふらむ名取』理事・大甲秋さん



●持ち出し袋大切 災害はいつ起きるか分からない。非常持ち出し袋は玄関、車、寝室に分散しておいてあり、それぞれ中身を変えている。震災の経験上、やはり靴が大事だ。地域の再生はこれから。コミュニティづくりが鍵になる。『ふらむ名取』代表理事・格井直光さん(60)



●住民が集う場を 復興が少しずつ進み、まちは変化している。コミュニティの再生には住民の連携強化が重要だ。防災に限らず、単身世帯の孤独死防止にもつながる。住民みんなが集まれる場所づくりが第一歩になるのではないかと『ふらむ名取』代表理事・格井直光さん(60)